

鄉土的味覺

寺田寅彥

青空文庫

日常の環境の中であまりにわれわれに近く親しいために、かえってその存在の価値を意識しなかったようなものが、ひとたびその環境を離れ見失った時になって、最も強くわれわれの追憶を刺戟することがしばしばある。それで郷里に居た時には少しも珍しくもなんともなかったものが、郷里を離れて他国に移り住んでからはかえって最も珍しくなつかしいものになる。そういう例は色々ある中にも最も手近なところで若干の食物が数えられる。その一つは寒竹かんちくの筍たけのこである。

高知近傍には寒竹の垣根が多い。隙間なく密生しても活力を失わないという特徴があるために垣根の適当な素材として選ばれた

のであろう。あれは何月頃であろうか。とにかくうすら寒い時候に可愛らしい筍をよきよきと簇そうせい生せいさせる。引抜くと、きゅうつきゆうつと小気味の好い音を出す。軟らかい緑の莖に紫色の隈取りくまどがあつて美しい。なまで噛むと特徴ある青臭い香がする。

年取つた祖母と幼い自分とで宅の垣根をせせり歩いてそうけ

(筍ざる)に一杯の寒竹を採るのは容易であつた。そうして黒光りの

する台所の板間で、薄暗い石油ランプの燈下で一つ一つ皮を剥はいでいる。そういう光景が一つの古い煤けた油画の画面のような形をとつて四十余年後の記憶の中に浮上がつて来るのである。自分の五歳の頃から五年ほどの間熊本鎮ちんたい台に赴任したきり一度も帰らなかつた父の留守の淋しき、おそらくその当時は自覚しなかつ

た淋しさが、不思議にもこの燈下の寒竹の記憶と共に、はつきりした意識となつて甦つて来るのである。

虎杖いたどりもなつかしいものの一つである。日曜日の本町ほんまちの市で、

手製の牡丹餅ぼたんもちなどと一緒にこのいたどりを売っている近郷の婆さ

んなどがあつた。そのせいか、自分の虎杖の記憶には、幼時の本

町市いちちの光景が密接につながっている。そうして、肉桂酒にっけいしゆ、甘さとう

蔗きび、竹羊羹たけようかん、そう云つたようなアツトラクションと共に南国

の白日に照らし出された本町市の人いきれを思い浮べることが出来る。そうしてさらにのぞきや大蛇の見世物を思い出すことが出来る。

三谷みたにの溪間へ虎杖取りに行つたこともあつた。薄暗い湿つぽい

朽葉の匂のする茂みの奥に大きな虎杖を見付けて折取るときの喜びは都会の児等の夢にも知らない、田園の自然児にのみ許された幸福であろう。これは決して単なる食慾の問題ではない。純な子供の心はこの時に完全に大自然の懷に抱かれてその乳房をしゃぶるのである。

楊梅^{やまもも}も国を離れてからは珍しいものの一つになった。高等学

校時代に夏期休暇で帰省する頃にはもういつも盛りを過ぎていた。「二、三日前までは好いのがあったのに」という場合がしばしばあった。「お銀がつくつた大ももは」という売声には色々な郷土伝説的の追憶も結び付いている。それから十市^{とうち}の作さんという楊梅売りのとぼけたよう^{じよさい}で如才^{じよさい}のない人物が昔のわが家の台所を

背景として追憶の舞台に活躍するのである。

大正四、五年頃、今は故人となつた佐野静雄博士から伊豆伊東の別荘に試植するからと云つて土佐の楊梅の苗を取寄せることを依頼された。郷里の父に頼んで良種を選定し、数本の苗を東京へ送つてもらつた。これがさらに佐野博士の手で伊東に送られ移植された。そしてこの苗の生長を楽しみにしておられた博士は不幸にして夭折ようせつされたのである。亡くなられる少し前に、たしかこれらの楊梅が始めて四つとか五つとかの実を着けたという消息を聞いたことがあつたように思う。その後さらに数年を経過した現在のこの楊梅の苗の運命がどうなっているか。伊東へ行く機会があつたら必ず訪ねてみようと思ふもの一つにはこの楊梅のころ

ニーがあるのである。

色々の木の実を食ったことを想い出す。昔の高坂橋たかさかばしの南詰ななづめに大きな榎樹えのきがあつた。橙紅色の丸葉のような実の落ち散つたのを拾つて噛み砕くと堅い核の中に白い仁にんがあつてそれが特殊な甘味をもっているのであつた。この榎樹から東の方に並んで数本の大きな棕むくの樹があつた。棕の実はちよつと干葡萄のような色と味をもっている。これが馬糞などと一緒に散らばっているのを平気で拾つて喰うのであつた。われわれ当時の自然児にはそれが汚いともなんとも思われなかつた。これらの樹の実を尋ねて飛んで来る木棕鳥こむくどりの大群も愉快な見物であつた。「千羽に一羽の毒がある」と云つてこの鳥の捕獲いましを誠めた野中兼山のなかけんざんの機智けいちの話わたりごとを想い出す。

公園の御桜山おさくらやまに大きな榎まきの樹があつてその実を拾いに行つたこともあつた。緑色の楕円形をした食えない部分があつてその頭にこれと同じくらいの大さきで美しい紅色をした甘い団塊が附着している。噛み破ると透明な粘液の糸を引く。これも国を離れて以来再びめぐり逢わないものの一つである。

旧城のお濠ほりの菱ひしの実も今の自分には珍しいものになつてしまつた。あの、黒檀こくたんで彫刻した鬼の面とでも云つたような感じのする外殻を噛み破ると中には真白な果肉があつて、その周囲にはほのかな紫色がにじんでいたように覚えている。

公園と監獄、すなわち、今の刑務所との境界に、昔は濠があつた。そこには蒲がまや菱がが叢生そうせいし、そうしてわれわれが「蝶々蜻蛉とんぼ」

と名付けていた珍しい蜻蛉が沢山に飛んでいた。このとんぼはその当時でも他^{よそ}処ではあまり見たことがなく、その後他国ではどこでも見なかった種類のものである。この濠はあまり人の行かないところであった。それが自分の夢のような記憶の中ではニフの棲^{すみか}処とでも云ったような不思議な神秘的な雰囲気につつまれて保^た存されているのである。帰省してこの濠のあつたはずの場所を歩いてみても一向に想い出せないような昔の幻影が、かえって遠く離れた現在のここでの追憶の中にありありと浮んで来るのである。これらの樹の実の記憶には数限りもない少年時代の生活の思い出がつながっている。そうしてこれらの自然界とつながっているものほどその思い出の現実性が深いように思われるのである。

交通の発達につれて都会と田舎の距離は次第に短縮する。今ではたいていの田園の産物もデパートの陳列棚で見られるのであるが、それでもまだ楊梅や寒竹の筍は見られない。菱や色々の樹の実、実は土佐に限らぬものであろうが、しかしこれらの都会の食味の中に数えられないためか、どこでも手に入れることが出来ない。そういうものが食物になり得るといふ事さえ都会の子供等は夢にも知らないのである。考えてみると可哀相なような気がする。

滞欧中のある冬にイタリアへ遊びに行つた。ローマの大学を訪ねたとき、物理学教室の入口に竹のひとむら叢を見付けてなつかしい想いをした。その日の夕方、ホテルの食堂で食事のあとに出した菓物鉢の数々の果物の中にただ一つ柿の実がのっかっていた。同

時に食事していた客の誰よりも真先に自分のところへこの菓物鉢が廻つて来たので、自分は遠慮なくこのただ一つの柿を取上げた。少しはしたくないような気はしたが、天涯の孤客だからと自分で自分に申し訳を云つた。このローマの宿の一いっか顆の柿の郷土的味覚はいまだに忘れ難いものの一つである。

味覚の追憶などはあまり品の好い話ではないようである。しかしそれだけに原始的本能的に深刻な真实性をもっている。そうしてその背後にはやはり自分の一生涯の人間生活の記録が隠されているのである。

(昭和七年二月『郷土読本』)

青空文庫情報

底本：「寺田寅彦全集 第一巻」岩波書店

1996（平成8）年12月5日発行

底本の親本：「寺田寅彦全集 第三巻」岩波書店

1985（昭和60）年10月4日第2刷発行

初出：「郷土読本」高知市江ノ口小学校

1932（昭和7）年2月発行

※初出時の署名は「吉村冬彦」です。

入力：Nana ohbe

校正：松永正敏

2004年3月24日作成

2016年2月25日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

郷土的味覚

寺田寅彦

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>